

## ジョージ・スペンサー・ブラウンとニクラス・ルーマン

村上 淳 一

学者の死がその学問の終焉を告げるわけではないことは、言うまでもない。そのことは、一九九八年一月七日に七二歳で死去したニクラス・ルーマンとその「システム理論」にもあてはまる。ルーマン没後一年に当たって（本論文は一九九年一月脱稿）、かれの最後の名著『社会の社会』（上下二巻、一九九七年。社会を何らかの実体ではなくコミュニケーション・システムとしてとらえる）を机上に置き、そのシステム理論が孤立した「独自の理論」として形成されたものではなく近年の諸科学のめざましい発展に刺激されつつ生まれたものであること、だからこそ次世代の研究者にも大きな刺激を与え続けるであろうことを、ルーマンがとくに参考にしたと思われるスペンサー・ブラウンの著作『形式の法則』と照らし合わせながら論ずることにしたい。

一 形式計算

ルーマンによれば、いま「社会」というものについての認識を妨げているのは、互いに支え合っている次のような四つの見方である。すなわち、①社会とは具体的な人間たち、および人間相互の諸関係から成っている、という見方、②したがって社会は、人間たちの合意——かれらの意見の合致と、かれらの目標設定の相補性——によって組み立てられ、少なくとも統合される、という見方、③社会とは地域的・領域的に限定された単位だから、ブラジルはタイとは別の社会、アメリカ合衆国はロシアとは別の社会、そして多分ウルグアイもパラグアイとは別の社会だという見方、④だからそれぞれの社会は、もろもろの人間集団やもろもろの領域と同様に、外部から観察できるものだ、という見方。

ルーマンは、こうした見方にとらわれた社会学の伝統を離れて、社会理論の革命的な枠組みを社会学の外部から社会学に持ち込もうとする。「われわれが手がかりとするのは、システム理論の近年の発展であり、また、システム理論とは別の名称をもつ理論——サイバネティクス、認知科学、コミュニケーション理論、進化理論——の発展である。

どんな名称をもつにせよ、これは学際的な討論連関であって、それはこの二、三〇年間に根本的な変化を遂げ、五〇年代ないし六〇年代初期までのシステム概念の世界とはほとんど共通点がないものになっている。この斬新で魅力的な知的発展によって初めて、自然科学と精神科学、ハード・サイエンスと人文科学、法則を対象とする分野とテクストを対象とする（ヘルメノイティク的な）分野を対置する旧来のやり方が、回避可能になったのだ<sup>2</sup>。

なかでも重要なのは、（所与の）客オブジェクト体から、（設定される）区ディスタクシオン別への転換だ、とルーマンは言う。ルーマンの関心を惹くのは、既存のさまざまな区別を内容的観点から論ずることではなく、そもそも区別すること、区別の線を引く

(マークすることの意味を解明する作業である。これをシステム理論にあてはめれば、マーク(区別の形式<sup>フォーム</sup>)の一方の側(何らかの動機に基づき<sup>ヴァリ</sup>価をもつものとして命名される側)がシステム、他方の側がそのシステムにとつての環境だということになる(環境には、当該システムとは別の区別に立脚するさまざまなシステムがあり、それらは相互にシステム/環境の関係に立つ。たとえば人間の意識というシステムにとつて、政治システム・経済システム・法システム・学術システム等々は環境であるが、逆に、これらのシステムのいずれにとつても、意識システムは環境である)。この「区別」の観念を、ルーマンは、イギリスの数学者ジョージ・スペンサー・ブラウン(一九二二—)の著書『形式の法則』(一九六九年)に負っている。<sup>(3)</sup>『形式の法則』は、「形式計算」を論じた数学の著作であるが、その内容を理解することは、少なくとも非専門家の筆者にとつては至難である。しかし、スペンサー・ブラウンは、自分の校閲を経た一九九七年のドイツ語版(トーマス・ヴォルフ訳)に「はしがき」を寄せ(独訳版への「はしがき」として、すでに一九八五年に英語で執筆されていたものが、今回独訳されて、「国際版」と称するドイツ語版の冒頭に置かれている)、『法則』の全テキストは次のように言い表すことができる」と述べている。

「或る物<sup>ドイツ</sup>であるものと、そうでないものとは、形式<sup>フォーム</sup>においては全く同一である。<sup>(4)</sup>つまり、同一の形式・定義・区別が、物の境目ないし記述としても、物でないものの境目ないし記述としても、はたらく。そこから、全<sup>アレクシニヒツ</sup>と無<sup>ニヒツ</sup>は形式として同一であるという帰結が、容易に証明される(証明—そのいずれも、いかなる形式ももっていない)。ここで疑問の氷解を妨げるのは、次のような誤った見方である(西洋の哲学者たちは何百年もその誤りに取りつかれてきたのだ)。無は形式をもたないゆえに、条件的構造をもちえず、観察される現象の基礎たりえない、なぜなら、観察される現象はまず間違いなく条件的構造をもつからだ、という見方が、それである。私の説は全体として、この間違いを正そうとするものだ」。

すなわち、スペンサー・ブラウンによれば、無は条件的構造をもっている、とされる。無のなかで区別がなされるならば、そこから必然的に、その形式の諸法則（それが「形式の法則」という自著のなかで提示される）に従った世界が出現するはずだから。「この本のどこを探しても、何が存在するか、何がどのように存在するか、を語る文がないことに注意されたい。何かについて何か語られているわけではないのだ。ここに見られるのは、「〔区別せよ〕に始まるまざまの」命令文に従うように、また、われわれがその過程で、発見して得た結果をときどき観察するように、という指示だけだ。言い換えれば、この本は、語りと解釈という自己欺瞞的な「他人の御託宣を主観的に解釈しながらその内容を実在視して信ずる」方法を全くとらず、命令と観察という自己修正的な「形式計算」の諸法則＝算法に従いながら計算し、複雑性を縮減してゆく」方法をとっているのである。……モーツアルトは誰かに何かを語ったことはないし、それによつて誰かを惑わせたことはない。かれはオーケストラに対して、どの楽器がどの音符をどの時点で奏でるべきかを正確に示す指示を与えたにすぎない。オーケストラが、たとえばクラリネット協奏曲のための指示に——質問も説明もなしに——従いさえすれば、天上の音楽が鳴り響くのである。……もう一度言おう。語りによつて知られるものは、何もなし」。

ルーマンのいう「客体から区別への転換」、言い換えれば存在から形式への転換がここに宣言されていることは、明らかである。しかし、主観を排してもつぱら「形式計算」の算法に従うことにより確かな結論に至ろうとするスペンサー・ブラウンの叙述が、「形式の法則」は世界中で最もへもつてまわったところのない「本だ」「一九九四年版への「まえがき」というかれの自己評価にもかかわらず難解であることは、かれとしては比較的平易な右の叙述からすでに予感されよう。ガーボル・パールによれば、ポール・ワツラヴィクはこう述べている。「形式の法則」が天才の作品であることは間違いない。しかし、いままで、この本の二頁目でもう付き合いきれずに読むのを断念する羽目に陥らな

かつた人は、あまりいない。ブラウンはへはしがきで、この本を理解するにはへ読者は英語が判り、数を数えることができ、数が普通どう表記されるかを知っているだけでよい」という謙虚な言い方をしているのだが。パールは、また、バートランド・ラッセルの自伝から引用している。「かれ「スペンサー・ブラウン」の来訪の日が近づくと、私は、かれの仕事、かれの風変わりな叙述にはとてもついてゆけないと思い始めた。私は不安になった。ところが、いよいよブラウンがやってきて、その説明を聞いてみると、それは理解できるものであり、その仕事はついてゆけるものだということが判った。それは奇抜なもの、おそらく卓越したもので、私は二日間をおおいに楽しんだ」。かつてホワイトヘッドと共に『プリンキア・マテマティカ』を著したラッセルにとつてさえ、スペンサー・ブラウンの仕事は当初「ついてゆけない」ように見えたのである。しかし、まずは本文の五頁目までの、「形式計算」の出発点を紹介してみよう。

スペンサー・ブラウンは、ある空間を「区別せよ」という指示に従う最初の線引きで区別された二つの側のうち、<sup>ヴァリュ</sup>値をもつものとして命名された側（いわば内側）と、もう一つの側（いわば外側）との違いを示すマークとして、直線ではなく（逆し字形の）直交線<sup>クロス</sup>「 $\perp$ 」を用いる。そして、そのマークのコピー（トークン）を駆使して「形式計算」を展開する。出発点とされるのは、二つの公理である。すなわち、まず「呼称の法則」は、最初に命名された名前を再度唱えても、名前によって示<sup>インディケイト</sup>される値は変わらない、というものである。スペンサー・ブラウンによれば、「内容<sup>コンテンツ</sup>が値をもつなら、その値を示すために、内容に向けて境目を横断<sup>クロス</sup>する動機または意図または指示を援用することができる。だから、境目の横断<sup>クロス</sup>は内容の値と同じである」。最初の区別 $\perp$ 直交線 $\perp$ 」がすでに、値をもつ側に向けた横断<sup>クロス</sup>を含意しているわけである（crossという語が二重の意味で用いられている）。次に、「横断<sup>クロス</sup>の法則」は、境目を再度横断するならば、最初の横断の値も二度目の横断の値も失われる、というものである。スペンサー・ブラウンによれば、「境目の横断が意図され、それから再度の横断が意図されるならば、二つの「異なる」意図を合わせて示される値は、二度

の横断のいずれによっても示されない値である。つまり、どんな境目にとつても、再度の横断は横断ではない。

これら二つの法則を直交線ククロスによつて表現すれば(原文に従つて横書きにする)、「呼称の法則」は「 $\downarrow$ 」「 $\parallel$ 」、「横断の法則」は「 $\parallel$ 」と表記される。後者の等式について説明すると、その右辺は空白であり、マークされない状態(区別されていない空間)を意味する。「横断の法則」についてのスペンサーブラウンの説明によれば、「どのトークンもそれぞれ固有の形式による区別である」から、あるトークンによつて「最初の区別」(それは、「呼称の法則」についてのスペンサーブラウンの説明から明らかなように、その内容に向けた横断を含意している)を——今度はトークンによる区別に向けて——横断するならば、最初の区別と二度目の(トークンによる)区別のいずれの意図も実現されず、マークされない状態(無が生ずることになる。等号に代えて矢印を使うと(原文に従つて横書きにする)、「 $\downarrow$ 」は縮減、「 $\downarrow$ 」は確認、「 $\downarrow$ 」は消去、「 $\downarrow$ 」は穴埋め、ということになるが、こうしたトークンを複雑に積み重ねては整理してゆくのが、スペンサーブラウンの「形式計算」なのである。

しかし、その「形式計算」の中味を理解することは、容易でない。すでに「横断の法則」にしてからが、誤解を免れていない。たとえば、バーデンヴェルテンベルク州の「南西ドイツ放送」が提供した教養番組で、作者のガール・パールは、男女二人にこう説明させている。男の声「……この「横断の」法則が言っていることはこうです。横断してすぐに逆横断することは、全然横断しないのと同じことだ。行ったり来たり(nin und her)は、同じ場所にとどまると変わらない」。女の声「ごく普通の言い方をすれば、二重の否定は確認コンファーマンツだということ、面白くはないというのは、面白いということですね」。これは、二度の横断が横断の消去キヤンセーション(マークされない状態)を帰結するというスペンサーブラウンの論旨と正反対の理解であろう。ともあれ、困難な読解の末に「形式計算」の真髄に迫ることができれば、得るところは大きいかもしれない。とくに、「形式の法則」は三段論法をも論じており(とくに補論二「計算を論

理学的に解釈すると)、三段論法の「縮減」のための「形式計算」が判れば法律家にとつても得るところが多いかもしれないが、残念ながら現在の筆者はそれを試みる余裕と能力がない。しかしルーマンは、「縮減」にはおよそ興味を示していないので、本稿の目的からしてこの問題には深入りせず、先に進むことが許されよう。

【注】

(1) Niklas Luhmann, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Bd.1, 1997, S.24 f.

(2) Luhmann, a.a.O., S.60. 法曹養成には教養を身につけさせることも必要だと説かれるとき、論者の念頭にあるのは多くの場合、自分たちの教養の背景となっている——そしてルーマンによれば「社会についての認識を妨げている」とされる——伝統的な見方であろう(古今東西を問わず、法律家は保守的である)。しかし、大学で教養科目を担当する学者のなかには、近年の「斬新で魅力的な知的発展」を若者に伝えることによってこそ知的刺激を与えることができると思われる者が少なくあるまい。法学教育は、「この二、三〇年間」のギャップに、どう対応するつもりであろうか。「斬新で魅力的な知的発展」は別の世界のこととして、旧来の見方に立脚した法学教育を続けてゆくつもりか? この場合、学生は、知的魅力に富んだ教養をなげうって法技術の世界に飛び込んでゆかざるをえない。それとも、教養科目の授業で新しい知的発展を学んだ若者が、自然科学と精神科学の境界を超えた新しい「討論連関」の世界と、人(主体)・物(客体)・行為といった旧来の法的概念世界への没入との落差を承知の上で、しかし知的刺激から遮断されることなしに、法学を学んでゆけるように協力すべきか? この場合、法学教育の担当者自身が新しい知的発展を多少ともフォローできていなければならぬ。

(3) George Spencer-Brown, *Laws of Form*, 1969. ルーマンが『社会の社会』で用いているのは『形式の法則』の一九七九年の版であるが、ルーマンはすでに、遅くとも一九八四年の『社会システム』において、七二年の最初のアメリカ版を用いている。なお、大澤真幸／宮台真司訳の日本語版『形式の法則』が、一九八七年に朝日出版社から刊行されている。この邦訳書には、ドイツ語版のための「はしがき」、九五年執筆の「まえがき」、九三年執筆の(九四年版への)「まえがき」

はもとより、七八年執筆の(七九年版への)「まえがき」、七二年執筆の「最初のアメリカ版へのまえがき」がいずれも欠けており、六八年執筆の「まえがき」だけが訳出されている。また、邦訳書には補論(Apendix)は一と二しか収録されておらず、補論三「バートランド・ラッセルと『形式の法則』」(九二年執筆。ドイツ語版に英文も収録)、補論四「自然数の代数」(六一一年執筆。ドイツ語版に英文のみを収録)、補論五「地図は四色刷りで足りる」という問題の二つの証明」(七九年に執筆された原稿を、著者自身が九六/九七年に要約してロイヤル・ソサイエティ図書館に納めたもの。ドイツ語版に英文のみを収録)、補論六「結び」(九七年執筆。ドイツ語版に英文も収録)は収められていない。

スペンサー・ブラウンは一九二三年にリンカンシャーのグリズビーに生まれ、数学を学んだ後オックスフォードで論理学を教えたこともあったが、ロンドンに移って、コンピュータのためのトランジスタ回路の設計等に携わった。そのさい古典的な論理学では解けない複雑な問題と取り組んだことが発端となつて、一九六九年の『形式の法則』が生まれたのである。しかし、スペンサー・ブラウンはその直後に一転して、女子学生の両親の反対によって挫折した自分の恋を語る「このゲームができるのは二人だけ」(Only Two can play This Game, 1971)を、シームズ・キース(James Keys)という筆名で発表し、『形式の法則』から一旦離れる(以上については Rudolf Maresch, Ariadne hat sich umsonst erhängt, <http://www.clhreise.de/bin/fp/deutsch/inhalt/buch/2311/1.html> および Gabol Paál, Logik des Unsinnms, aus der Reihe: Paradoxien, SWR2 Wissen, <http://www.sw2.de/wissen/manuskripte/paradoxien.1.html> を参照した)。しかし、その後スペンサー・ブラウンは、『二人だけ』によって得られた「無は無自身によってしか変わらない」という認識によつて、「無が何も変えることができないうならへ最初の区別」が以後の一切を出現させる」という「形式の法則」の思考を再確認し、『二人だけ』のドイツ語版(Dieses Spiel geht nur zu zweit, 1994)に寄せた「ドイツ語第一版へのはしがき」において、「当時は知らなかったが、釈迦牟尼は二千五百年前にこれと全く同じ認識に達している」と述べている。なお、マーレシユによれば、『形式の法則』は、ハインツ・フォン・フェルスターが初版に寄せた好意的書評もあつて、サイバネティクスや神経生理学や生物学やイルカ研究の学者にとつての「虎の巻」になり、一九七三年にカリフォルニアのイーサレン研究所での学際研究会(グレゴリー・ペイトソン、ハインツ・フォン・フェルスター、ジョン・



リリー等が参加)の開催を促すことになったものの、広い範囲の読者を得るには至らなかった。ドイツではようやく、マトウラナとバレラ(いずれも自己塑成論で著名なチリの生物学者)による『形式の法則』の「発見」が知られるに及んでブーアカンプ書店が独訳の刊行を計画したが、スペンサー-ブラウンが英語の原文と独訳を両方とも載せるように要求したため、その計画は頓挫したという。独訳版への「はしがき」がすでに一九八五年に執筆されているのは、こうした事情によるものであろう。

(4) Spencer-Brown, *Gesetze der Form*, 1997, S.x ff.

(5) 「何らかの区別によって分けられた空間を、その空間のすべての内容を含めて、区別の形式と呼び、最初の区別の形式を原形式(die Form)と呼ぶ」(a.o., S.4)。

(6) *Paal*, a.o.

(7) *Paal*, a.o. 実はルーマンも、パールと同じように「再度の横断」を「行ったり来たり」ないし「出たり入ったり」(Hin- und Herkreuzen)と解している(Juhmann, a.o., S.61)。しかし、ルーマンはむしろ、「行ったり来たりは同じ場所にとどまるのと同じだ」などとは言っていない。ルーマンは、「横断の法則」を、「区別はその使用のさいに自己を同定できないという洞察の、別のヴァージョン」だと言う。同じトークン(たとえば法/不法の区別)の境目はその区別を使うたびに動く(たとえば法と不法の内容は、法システムの自己準拠的作動によって変化する)、という指摘であろう。ルーマンは、スペンサー-ブラウンの言う「再度の横断」を、システムから一旦外界に出た上でシステムにリ・エントリーするための「出たり入ったり」として捉えていると思われる。けれども、ここでスペンサー-ブラウンが言う「再度の横断」がそのような「出たり入ったり」を意味するものか、疑問である。たしかに、スペンサー-ブラウンが「どのトークンも最初の区別の境目を横断する指示として意図されたものとせよ」と言うのに続けて、「その横断は、当該トークンの内側に示された状態から離れるものとせよ」「その横断は、当該トークンによって示された状態に向けてなされるものとせよ」と記すとき、トークンの内側から外側へ、外側から内側へという「行ったり来たり」が念頭にあるものと読めなくてはならない。しかし、「そのトークンの内側」に「最初の区別」があると読めば、その「最初の区別」から離れてトークンによる別の

区別をめざす横断(「最初の区別」が横断によってめざした値とは別の値を念頭に置いた、トークンが新たにマークした状態に向かう第二の横断)がなされるということになる(『の内側の「は「最初の区別」横断」、外側の「は「最初の区別」を横断する第二の区別」)。その結果、両立しない二つの区別によって「最初の区別」も第二の区別もキャンセルされ、「マークされない状態」が生ずるということであろう(システムと外界との区別がすべてキャンセルされるといふことは、ルーマンのシステム理論にとって致命的ではないか)。スペンサー・ブラウンがリ・エントリーを論ずるのは、もつと叙述が進んでからのことである(後述)。

## 二 再帰性

ルーマンがスペンサー・ブラウンに負っているのは、とりわけ re-entry の概念である<sup>(1)</sup>。ここでは、「形式計算」の展開を順次フォローすることを断念して、シュテファン・ルイボトイキの比較的平易な解説によって、スペンサー・ブラウンにおける再帰<sup>リ・エントリー</sup>の観念の登場を紹介することにしよう。

ルイボトイキは、「形式計算」を「変化しない形式」、「変数を含む形式」、「変化する形式」に分けて説明を試みる。「ダイナミックな形式」とは、フィードバックを伴う形式のことである。ルイボトイキは言う。「この問題を研究したのは、スペンサー・ブラウンの他に、とりわけフランシスコ・バレラであった。この話を理解してもらうには、形式的な記述と非形式的な記述の区別を心得ておく必要がある。スペンサー・ブラウンの「形式的」叙述はこのテーマについての広範な議論を生むきっかけとなり、その議論が大幅な精緻化をもたらすことになった。その議論が、突然の閃きを心理的に準備したとも言えよう。それは、ダイナミックな——フィードバックを伴う——形式という見方であった。これによって、論理学の諸原理と諸システムの力学が出会うことになったのである。こうして得られた新たな領域に

において、(数学者的野心さえあれば)カウフマンとバレラの形式主義と取り組むことができるようになる。ここで到達した臨界点は、実は、人間による概念形成一般の弱点とまでは言えないにせよ、すべての論理的体系の弱点にかかわるものである。形式的な概念を記述し利用することは、まさに、固定的・固持的な体系へと誘導されてしまう危険を伴う。しかし、本物のシステムは、変化という特性、自分自身の否定との共存という特性をもつものである。この特性は、ステイックなものによって示すことができないものなのだ。形式の変化をもたらす「フィードバック」こそが、スペンサー・ブラウンにおける「リ・エントリー」なのであろう。

『形式の法則』が「変化する形式」を検討する段階に移るのは、その第二章「二次方程式」においてであるが、一九七二年に執筆された「最初のアメリカ版へのまえがき」で、スペンサー・ブラウンはこの展開を次のように解説している。

「初等代数においてはさまざまな複雑な「パラドクシカルな」値が事柄の成り行きとして受け容れられている。それらの複雑な値を棚上げしては、高等技術はありえないであろう。しかし、そうした複雑な値は、「論理を代数的関係として表現しようと試みた一九世紀イギリスの数学者ブールの」ブール代数においては——ということとはつまりわれわれの一切の精神的決定過程においては——「あれかこれかの選択として」処理できない。ホワイトヘッドとラッセルは、もつぱらそのためだということを明示しつつ、独自の規則を導入して、これを「 $\wedge$ 型の理論」と名付けた「たとえば「 $\wedge$ 」の床屋は自分で髭を剃れないすべての村民の髭を剃る」という文に見られるパラドクス(床屋は自分で髭を剃れるから自分の髭を剃れない)は、床屋たちの集合をその他の村民の集合とは型を異にするものとして処理される」。いまでは、この解決は誤りだということが判っている。「二つの集合を区別しなくともパラドクスを解消できるとスペンサー・ブラウンは考える」。だから、この分野には、高等技術は——考えられないことはないはずだが——依然として全く存在しないのである。……私はラッ

セルが〈型の理論〉をとっていることを知っていたから、そんな理論は不要だという証明をもつて一九六七年にラッセルを訪ねたとき、不安がないわけではなかった。しかし、かれが非常に喜んでくれたので、ホッとした。かれが言うには、〈型の理論〉は自分がホワイトヘッドと共に考え出した理論のなかで最も恣意的なもので、本来理論というよりは方便というべきものであり、自分は長生きしたおかげで問題が解決されたのを見ることができて嬉しい、ということであった」。

引き続き、スペンサー・ブラウンは、かれの解決を次のように解説する。ラッセルとホワイトヘッドが「型の理論」によつて排除しようとしたパラドクスは自己関連（自己包摂）に伴うパラドクスであり、その代表例は「この言明は誤りだ」という言明、真偽のいずれとも判断できない言明である。これは、言明が——無意味でないとするれば——真、偽のいずれかだという前提をとるからこそパラドクスなのであつて、 $-1$ の平方根を虚数として捉える発想を参考にすれば、パラドクスを排除せずに解消することができる。「第一章で試みるのは、この観念をプール代数に及ぼすことである。それは、有効な論拠の言明クラスが三つ「真・偽・無意味」だけでなく、真・偽・無意味・仮想的の四つに分けられるということだ。それが論理学や哲学や数学にとつて、そして物理学にとつても有する意義は、きわめて大きい」。

さらに、第二二章「形式への再帰」は、次のように説き起こされる。「形式という観念は、区別したいという欲求に基づく。この欲求を前提とするならば、われわれは形式から逃れることができない。ただし、われわれは、形式を任意の仕方で見ることができ、形式を見る仕方の一つが、指示記号による計算である。われわれは——何の指導も受けずに、また、さまざまな法則とか与件とか定理とか帰結とかを顧慮することによつて妨げられずに——形式によつて計算を見ることができ、計算において形式を見ることができ」。

引き続き指示記号（ここでは、直交線ではなく円が使わ

れる)による計算の四つの実験例(エクスガメンツ)が示される。結論としてスペンサーブラウンが強調するのは、形式への立ち帰る(フィードバック)による単純化の可能性である。

「この実験から、次のことが見えてくる。形式を出て形式に立ち帰る旅にさいしてわれわれが従った「指示記号の」配置による計算の諸原理は、「初等代数における」もろもろの数の最終的な縮減可能性「 $\downarrow$ 」「 $\downarrow$ 」、もろもろの関係の消去可能性「 $\downarrow$ 」から出てきたものである。ただ、われわれは、この諸原理の使用を或る段階「フィードバックが行われる段階」に結びつけることによってのみ、或る世界を何らかの形式で把握し、確保することができる。そのような世界をわれわれが理解できるのは、それがいま現象している姿を見出すことによつてではなく、その世界をもたらしたわれわれの最初の行為「区別形式」を想起することによつてである。こう考えれば、計算自体が、形式を想起する早道だということが判つてくる。われわれが形式という中心的状态を離れて、いわば存在の周辺的条件に向けて進んださいに、われわれが見たのは、われわれが記述しながら歩んでゆく旅の舞台を形成した「初等代数の」へ呼称の法則」とへ横断の法則」が、慣れ親しんだ時間の遊びにおける恒星になつてゐる様子であつた。定理と称するものはその恒星に捧げられる窮極の供え物に他ならないが、その供え物にわれわれが寄せる期待と不安が、支えになつたのである。われわれが形式に再帰(リ・エントリ)してしまえば、それらの供え物はすべて捧げてよかつた「定理はすべて従つてよかつた」とされる。さまざまの定理は、疑問があるかぎりで必要とされるにすぎない。それは、疑問がなければ不要である」。

ところで、こうした再帰性は、実は「外部の観察者」の観念と不可分に結びついている。右の「実験例」について、スペンサーブラウンはこうコメントしている。「或る円周の、外部空間にとつての値は、マーキングの値である。なぜなら、いまや空間は、マーキングによつて区別されるのだから。観察者もまた、やはりマーキングのことである。

なぜなら、かれは、自分が占めている空間を区別するのだから。これらの実験例において、円は形式であり、円周は形式の空間を成す区別であると考えよ。この見方によれば、任意の空間における区別は、その空間を区別するマーキングのことである。同様に、また逆に、或る空間におけるマーキングとは、区別することである。これから判るように、最初の区別「形式」と、マーキングと、観察者とは、互換的であるばかりでなく、形式としては同一である<sup>7)</sup>。注意すべきは、「観察者」が、観察される対象空間にマークする者として「外部」に位置づけられているにもかかわらず、もはや客観的な存在(物)を認識する主体(精神)として理解されてはいないということである。「外部の観察者」は、実はすでに観察対象に繰り込まれているのである。

「物理学者によって記述される世界を瞥見しよう。世界は若干の種類の素粒子から成っている。それらは、固有の空間に放たれるときは、波として現れる。……とここで、右のすべてを記述する物理学者自身が、その見解によれば、これらすべてから成り立っている。要するに、物理学者の記述する素粒子の集まり(それで必要十分である)が物理学者自身の発見し記録した一般法則によって、またそれに従って結びつくことにより、物理学者自身が成り立っているのである。こうして、われわれは、われわれの知っているこの「観察者と一体化した」世界は——自分自身を見られるかぎりで——自分自身を見るために成り立っているという事実から、逃れることができない<sup>8)</sup>。しかし、世界が自分自身を見ることが、<sup>9)</sup>「見る自分」と「見られる自分」に別れるということ、自分自身を見るために自分自身から離れ、自分自身のままではなくなるということを意味する。このパラドクスを免れるためには、次のような普遍法則を立てる途がある。「へきみはその時々、きみがいま知っている細部と可能性に従って、あれこれの世界を組み立てるであろう。しかし、きみが組み立てたものは、すぐに全てではなくなる。なぜなら、きみがいま在るものを捉えたとき、世界はそこから生ずるものを捉えるために、新しい次元に拡張されるからだ<sup>10)</sup>。こうして、世界は、自分の得た情

報を考慮して、在るとおりのわれわれが在るとおりのわれわれを捉えようとして用いる望遠鏡の視野から隠れる。蛇が自分の尾を呑み、犬が自分の尻尾を追うようなものだ<sup>(9)</sup>。ここには、ハインツ・フォン・フェルスターの「循環的因果性」の観念が先取りされている。

さて、ルーマンにおけるリ・エントリの観念は、かれが依拠していることをしばしば明言するスペンサー・ブラウンのそれと同一であろうか？

【注】

(1) マーレシユは言う。「著者が親しく校閲したこの優れた翻訳[Gesetze der Form]によって、少なくとも、〈形式計算〉は社会学者ニコラス・ルーマンが見た幻影にすぎないという神話はついに抹消されることになった。フランシスコ・パレラの生物学「自己塑成論」を多分唯一の例外として、スペンサー・ブラウンの数学ほど、ルーマンの現代社会学理論に役立つ、現代社会の複雑な機能を記述するに足りる方法を提供したものはない。そのことだけでも、ドイツ語訳の試みに対するスペンサー・ブラウンの懸念を払拭し、ドイツ語圏読者が本書を読めるようにしたポーハイマー書店は、賞賛に値する。著者執筆のさきまのへまえがきくをすべて収録した点でも、立派なものであせ」(Maresch, a.a.O.)。

(2) Stephan Rybotycky, Spencer-Brown's Formen - eine Einführung, <http://www.schieper-online.de/rybox/systeme/sbformen.htm> にあせ。リュボトイキがカウフマンとバレラの著作として参考文献に挙げているのは、Kaufman, Louis H./Varela, Francisco J., Form dynamics, Journal of Social Biological Structures, 1980, 3, 171-206 であせ。

(3) そのさい、スペンサー・ブラウンは、 $x^2+1=0$ ,  $x^2=-1$ ,  $x=-1$  とした上で、「これは(論理学における類似の言明と同様に)自己準拠的[自己包摂的]であることが判る。求められる平方根 $x$ の値が、求める式に再び投入されるからである」と言う。 $x^2+1=0$  とすると  $x^2=-1$ 、 $x=-1$  とすると  $x^2=1$ 、 $x=1$  とすると  $x^2=1$ 、 $x=1$  ということになる。これはパラドクスに

他ならないが、数学は、アウトプットがインプットにフィードバックされる結果アウトプットがたえず変動するという再帰性のパラドクスを解消するために、 $-1$ の平方根を虚数 $i$ として利用している、というのがスペンサー・ブラウンの論旨である。これに対しては、そのような虚数(ないし仮想的真理値)は方便にすぎないのではないか、という疑問が直ちに生まれよう。スペンサー・ブラウンは時間の観念を導入することによって、これに対抗する。前出のパールの放送原稿(『南西ドイツ放送』の教養番組)から引用しよう。

女の声「ここでブラウンは巧みな手を使う。かれは、時間という新たな次元を持ち込み、へパラドクシカルな言明の仮想的真理値は時間のなかの振動と同じだ」と言う。真と偽の、二つの値の間の不断の振動だということだ。この文は誤りだ」という文の真理値を求めよという問題を解くためのコンピューター・プログラムを考えてみよう。それは、われわれと同様に、まずへその文は誤りだ。文がみずからそう主張しているではないか」と答えるだろう。だが次に、それを否定する結論を出すだろう。この文が誤りなら、それを否定する言明が真である。つまりこの文は正しい」と。だから誤り、だから正しい……。プログラムは(偽・真・偽・真)の反復によって答えるだろう。プログラムが止められるまで。エンドレスのループのように」。……男の声「サーモスタットのダイヤルを一定に保っておけば、暖房は規則的に入ったり切れたりを繰り返す。暖房の状態を示すコンピューターがあれば、その画面には(入・切・入・切)が交互に示されるだろう。これは、コンピューターがパラドクスの文を分析し、真・偽を交互に示すのと同じことだ」。女の声「ジョージ・スペンサー・ブラウンがパラドクスを——かれはパラドクスよりは(仮想的真理値)と言うだろうが——振動と解したとき念頭にあつたのは、おそらくそのようなアナロジーであつた」(Patil, aa.O.)。

(4) 法学においても、複雑な問題を初等代数的な論理で解決しようとするならば法の解釈・適用はますます複雑化せざるを得ないが、法の解釈・適用を再帰的・循環的な作動としてとらえればパラドクスはおのずから解消する、と言うことができる。しかし、その再帰的・循環的な作動を、縮減された初等代数の論理(二段論法)によってコミュニケーションしなければならぬというのが、少なくとも当面の課題なのではないか。

(5) Spencer-Brown, Gesetze der Form, S.60 f.



- (6) Spencer-Brown, a.a.O., S.90.
- (7) Spencer-Brown, a.a.O., S.65 f. 「外部の観察者」という観念は、スペンサー・ブラウンがまだ観察者を外部に置いてゐること、「観察者の内部化」というハインツ・フォン・フェルスターの洞察に達していないことを示している。村上「法の解釈」と「構成主義」(『桐蔭法学』六巻一号参照)。
- (8) Spencer-Brown, a.a.O., S.91. これは、後に「フグレン」によって Autologik (自己論理、自己包摂) の観念へと展開される。
- (9) Spencer-Brown, a.a.O., S.92. なお、マーレッシュは、こう説明している。「この計算の要点は、計算機に見られるように、区別が、かつてなされた区別に再導入されるということである。そのリ・エントリーを行うのが観察者なのだ。だから必然的に、区別と観察者は一体である。区別されたものは、「区別によって」外部化されたものを含めて形式に立ち戻る。……スペンサー・ブラウンの計算によって、世界は自分自身を見られるようになる。形式の法則に従うならば、テセウスを迷路から脱出させるためのアリアドネーの糸は、もう要らない。外へ通ずる道はない。すべては自分自身に、すなわち言葉に戻ってくるのだ」(Maresch, a.a.O.)。マーレッシュもまだ——最近のエッセイであるにもかかわらず——「区別と観察者の一体」の観念が「観察者の内部化」へとという構成主義的展開を見せるべきものであることを、明言していない。
- (10) フェルスターは、「現実を構成することについて」(初出は一九七三年)のエピグラムとして、"draw a distinction" というスペンサー・ブラウンの一句を使っており、また、「客体—固有行動のトークン」(初出は一九七六年)においては「自分の尾を呑む蛇」の図、および二匹の蛇が互いの尾を呑む図を示して、こう説いている。「ここでは、ある関係者の固有行動が(再帰的に)別の関係者の固有行動を発生させることによって、つまり一匹の蛇が別の蛇の尾を自分の尾であるかのように呑むことによって、つまり認知が他者の認知によって自己の認知を算出することによって、バランスが成り立つ。倫理は、この源を発する」(Heinz von Foerster, Wissen und Gewissen, 1993, S.110)。

### 三 ルーマンにおけるリ・エントリー

ルーマンは、『社会の社会』第一章Ⅲ「意味」において、かれのシステム理論におけるリ・エントリー概念を集中的に論じている。<sup>(1)</sup> ルーマンによれば、生体システムは身体という特別の環境によって自己の細胞を保護するが、その身体は物理的境界(皮膚など)によってみずからを守っている。これに対して、「心的システム「意識システム」と社会システムは、観察する作動<sup>オペラトイオン</sup>として自己の作動を展開し、その作動が——もっぱらシステム内部で生ずるにもかかわらず(そして、もっぱら内部で生ずるからこそ)——システム自身をその環境から区別することを可能にする。つまり、これらのシステムは、自己<sup>ゼル・ストレフエンツ</sup>準拠「自己のこれまでの作動との接続」と他者<sup>フremd・システム</sup>準拠「環境からの刺激」を区別する。これらのシステムにとって、境界は「生体システムの場合と違って」物理的に造られたものではなく、二つの側をもつ形式である」。

すでにこの引用における「形式」の概念がスペンサー・ブラウンの「形式」を下敷きになっていることは明らかであるが、自己準拠と他者準拠の観念は、スペンサー・ブラウンから離れたルーマン独自の展開を予感させるであろう。これに続く文章の冒頭部分は、スペンサー・ブラウンに見られないルーマン独自のリ・エントリー概念を示している。「これには、抽象的な言い方をすれば、区別が、その区別自身によって区別されたもののなかにへリ・エントリーすることである。システムと環境は、再度にわたって区別される。まず、システムによって生み出される区別として。次に、システムのなかで観察される区別として」(傍点は原文の強調箇所)。ここでは、システムと環境の境界線は「外部の観察者」によって引かれるもの(システムにとつての所与)ではなく、システム自身によって引かれるもの(したがって可変的なもの)であることが指摘された上で、その区別がシステムに内部化<sup>リ・エントリー</sup>され、「システムのなかで観察される」と説かれている(それは、「観察者の内部化」でもある)。このような、「内部化」としてのリ・エントリーは、スペンサー・ブ

ラウンのそれとはニュアンスを異にするものであつて、リ・エントリーの概念をシステム理論に導入するさいの、ルーマンによる拡張だと言つてよいであらう。だが、ルーマンは直ちに、スペンサー・ブラウンのリ・エントリー概念に立ち帰る。

「ヘリ・エントリー」の概念によつて、われわれは、同時に挙げるべき帰結、すなわち、算術と代数の枠内での数学的計算の限界であるとしてジョージ・スペンサー・ブラウンが示した帰結を、引用することになる。すなわち、システムは、それ自体としては予測可能性がない。システムは不特定性の状態に置かれるのであるが、それは、外部からの影響(独立変数)が予見不能であることによるのではなく、システム自身に由来する不特定性なのである。したがつて、システムは、過去の選択の結果を現在の状態としてシステムに役立てるために、記憶すなわちヘメモリー関数<sup>フアンクシオン</sup>「スペンサー・ブラウン」を、必要とする(そのさい、忘れることと覚えることが役に立つ)。そして、システムは、プラスに評価される作動とマイナスに評価される作動の間、自己準拠と他者準拠の間の、振動<sup>オシレーション</sup>状態に入る」。ルーマンはこの文の末尾に註を付けて、「われわれはこの区別によつて、システム理論に伴う理由からスペンサー・ブラウンを超えることになる」と述べている。<sup>(2)</sup>ここでルーマンがスペンサー・ブラウンを超えているとすれば、それは「自己準拠と他者準拠の間の」振動に限つてのことであり、その他の点ではスペンサー・ブラウンにおける再帰<sup>リ・エントリー</sup>の觀念に従つていと言つてよいであらう。

しかし、まさに「自己準拠と他者準拠との間の」振動と取り組むことによつて、ルーマンにおけるリ・エントリーは、やはり「内部化」というニュアンスを帯びる。システムと環境との区別、自己準拠と他者準拠の区別が内部化されてシステムのなかの「現実態<sup>アクトエリテイ</sup>」と「可能態<sup>ポテンシテイ</sup>」の区別になるといふ文脈で、ルーマンはこう論じている。「いささかスペンサー・ブラウン風に「?」、形式の内側を作動の誘因<sup>インダクター</sup>として、外側から区別できるかもしれない。そうすれば、

意味のある作動とは、すべての作動が形式の内側で起こる（または、起こらない）ということを目指す、そうした意味のある作動のためにこそ、形式の別の側、すなわち外側が、無限に広がるさまざまな可能性の空間として——意味なしでは済まないかぎり——必要とされるのである<sup>3)</sup>。したがって、ルーマンの場合、リ・エントリーは「形式を出て形式に立ち帰る」フィードバックの旅というよりは、区別の内側にあつて外側からの刺激に選択的に反応し外側から内側への横断を誘う「アトラクター」によつて惹起される「内部化」なのである。次の引用は、スペンサー・ブラウンにおいて「高等技術」としての再帰<sup>リ・エントリ</sup>と無関係ではないにせよその前提として位置づけられるにとどまった「初等代数的な〈横断の法則〉」が、ルーマンにおいては再帰性と混在していることを示している。

「〈区別と「その内側の」指<sup>ベツツァイヒング</sup>定<sup>ベツツァイヒング</sup>〉から作動によつて「外側を含む」一体性をもたらすものとしての意味<sup>ジン</sup>とは、自身自身を含む形式に他ならない。それは、〈区別と指定〉を「現実態と可能態として」区別する「区別し直す」ことなのだ。形式とは、結局のところ、区別自身のなか「区別の内側」で区別として再現される区別である。そうした状況「自己と他者の区別がなされるにもかかわらず、その区別が自己と他者の双方を含む一体性として扱われるという、パラドクシカルな状況」から脱出するためには、一個の飛躍、一つの脱パラドクスの指示、別の区別の利用によるパラドクスの隠蔽、といった手段に訴えるしかない。ラッセルとタルスキがそのために、〈型〉の区別ないし〈平面〉の区別「内側と、観察者のいる外側との区別」を提唱したことは、周知のとおりである。……スペンサー・ブラウンは、始めからパラドクスを無視するという手を使い、〈区別せよ〉という指示に基づく計算を推し進めて、形式を形式のなかに仮想的にリ・エントリーする「自分の尾を呑む蛇に譬えられる仮想的な一体性を基礎づける」可能性が見えるところまで到達した。これを意味という特殊な形式に——すなわち現実態と可能態の差に「まで相対化して」——適用すれば、意味は形式が形式のなかに内部化<sup>リ・エントリ</sup>されることによつてのみ作動能力をもつ、ということになる。形式の内側は、この内部化を受け容れることが

できなければならない。……すでに現実態において、可能態から現実態への横断クロッシング「ルーマンはわざわざ crossing という英語を使って、スペンサー—ブラウンを想起させている」がいかにして可能であるか、どのような横断が次に考えられるかを、見ておくことができなければならない」。

もとより、この混在は、ルーマンによるスペンサー—ブラウンの歪曲（ここでは「横断」が、スペンサー—ブラウンの予定しなかった文脈で使われている。一註7参照）として非難されるべきものではなく、システム理論における自己準拠と他者準拠のパラドクスを展開するための布石を、スペンサー—ブラウンの棋譜を手がかりに打ち直すものとして理解されよう。<sup>53</sup> リ・エントリーを集中的に論じた第一章III「意味」を、ルーマンは次のように結んでいる。

「以下においてわれわれは、システムと環境の区別の理論としてシステム理論を理解する。そのさい、システム自身が自己の作動によって自己準拠と他者準拠を区別するならば、システムの側での内部化リ・エンボウ「システムと環境の区別がシステム内部の自己準拠と他者準拠の区別になること」が遂行されうる。ところで、もつぱら社会システムを再生産する作動としてのコミュニケーションを扱うさいに手がかりとなるのは、媒質メディアウムと形式の区別である。……意味システム「意味によって一体性を維持するシステム」にとつて最終的な媒質は、意味である。ところで、意味という媒質のなかでの形式形成「区別における一体性の形成」は、意識的注意の統御「聖遺物や超常状態にある人々（予言者やヘマスメディアン）や王やメダルやサッカーやへふるさと」など、言語によらない社会的意味によって統御を実現すること」によるにせよコミュニケーションによるにせよ、システムの作動としてなされなければならない。言語的コミュニケーションによる場合（第二章二で論ずる）は、さまざまな語が文法と意味形成の要件に従つて連結され、文となる。最後に、社会的進化の理論も、そのパラドクスを展開する区別を利用する。存在するものが変化するというパラドクスは、可動の（可変の）要素ないし部分と不動の（不変の）要素ないし部分とを区別することによって昔ながらの仕方で解消されるのではなく、

ダーウィンの理論に従って、変異<sup>ヴァリエーション</sup>「変化」と淘汰<sup>セレクトション</sup>「選択」の区別によつて展開される。そのさい、変化はそれ自体、選択的に生ずる。なぜなら、システムはどんな刺激でも受けとめるのではなく、きわめて選択的に——変化に向けて——刺激されるのだから<sup>(6)</sup>。

ここではごく簡単な言及しかなされていらない「言語的コミュニケーション」についてのルーマンの所論は、かれのシステム理論の花冠を成すものであろう。すなわち、通常の行為理論的コミュニケーション論がコミュニケーションの「主体」という存在論的観念から出発するのに対して、ルーマンは、自己塑成的なコミュニケーション・システムがはじめて主体とか個人とか人間とかいった観念を生み出すと考える。「むろん生命も意識もなしにコミュニケーションが可能だというわけではない。それは、炭素も適温も地磁気も諸原子から成る物質もなしにコミュニケーションがありえないのと同様である。世界は複雑なものだから、ある事態を可能にする条件をすべて、その事態の概念化にさして列挙するわけにはいかないのである。そんなことをすれば、概念は輪郭を失い、理論を組み立てる技術として使えないものになってしまうから<sup>(7)</sup>」。そこで、ルーマンはコミュニケーション・システムから出発するわけだが、そのさい、媒質と形式の区別が重要な役割を演ずる。コミュニケーション・システムにおける媒質は言語であり、形式は肯定と否定の二分法的コードである。これは、「古典的な論理学、およびそれに対応した存在論が考えたのとは違って、存在と非存在、プラスの作動とマイナスの作動の、始原的な区別ではない。世界自体は、プラスとマイナスに割り切れないものである。だからこそ、何かを指示しようとするならば区別することができし、区別しなければならぬのだ。言い換えれば、区別は指示されなかつた方を無視するどころか、それを「アンマークされた空間<sup>アンマークト・スペース</sup>」として前提とするのである<sup>(8)</sup>」。ここでルーマンは、註を付して「形式の法則」に言及しているが、ルーマンが「マークされない空間」と言うのは、スペンサー・ブラウンであれば「マークされた空間のマークの外側」と言うところであろう(スベ

ンサー・ブラウンにおいて「マークされない空間」は、無である。

揚げ足取りはやめて、話を本筋に戻そう。ルーマンによれば、「自己塑成的・自己準拠的なシステムは、自己の自己準拠性をシンボライズするために、しかも同時に、自己にとつて本質的な循環性を中断できるように、そのような「二分法的な」コードを必要とする。二つの値は互いに通訳可能である。なぜなら、否定するためにはシステムの積極的な作動が必要であり、「値を」指定することはその否定を否定することと論理的に等価なのだから。しかし、この同語反復的構造は、同時に中断の用意を潜在させている。それは、システムをまず偶然に反応させ、次に自己組織化へと導く。自己組織化によって、イエスと言うべきかノーと言うべきかの手がかりが得られる。つまり、およそ社会というものには言語に備わっている非対称化によって生じ、それに条件化「Ⅱ選択」が接続しうるのである。値と値との関係だけでは、まだシステムにならないが、その関係が生ずるのは、それが「選択によって」システムをさまざまに形づくってゆく引きがねになりうるからである」ところで、二つの値の境目を横断するために、システムは時間を必要とする。「そうしたシステムは、みずからの自己塑成を続けてゆけるために、(スペンサー・ブラウンの言い方によれば)〈記憶〉<sup>メモリー</sup>と〈振動〉<sup>オシレーション</sup>を必要とする。……大まかに見て世界の現状が継続されるということから出発しなければならぬ」として、コミュニケーションの未来自体は「いままでどおりというわけではなく」発振関数を通じて初めて示される。その発振関数は、いま何が問題になっているかによって異なる様相を呈するのである。これは、言語の「二分法的」コードによって与えられた歴史的普遍性であるが、その普遍性は現実の社会構造の如何によってきわめて多様な形をとらう<sup>9</sup>る」。

このように、スペンサー・ブラウンの再帰性<sup>リ・レトリ</sup>概念は、ルーマンによって、まずはシステムと環境の区別のシステム自体への「内部化<sup>リ・エンター</sup>」として理解され(システム内部における自己準拠と他者準拠、現実態と可能態、プラスの作動とマイナス

の作動の区別)、次いで、その「内部化」された区別の二つの側の振動、とりわけコミュニケーション・システムにおける肯定と否定の「振動」(「再帰性」<sup>リフレクシビリティ</sup>) およびその振動の「中断」(「自己組織化」)として理解されて、システム理論の円熟に寄与することになった。こうした二段階のリ・エンタリー概念と、振動の「中断」の觀念こそ、「システム理論に伴う理由からスペンサー・ブ라운を超える」というルーマンの自賛を基礎づけるものであったと思われる。これはおそらく、法システムの維持および発展に関しても、きわめて示唆的な視角であろう。しかし、ここでは法システムへの限定を避け、社会の一般理論としてのその評価について、ウーヴェ・シマンクの次のような論評を引用するにとどめよう。

「自己塑成という観点をとった「八〇年代以後の」へ新しいルーマンが初めて、誰もが夢にも考えなかった社会理論を提示することになった。それによれば、社会はコミュニケーションから、しかもコミュニケーションだけから、つまり全くそのときどきのコミュニケーションから成り立つのであって、一つのコミュニケーションに接続して次のコミュニケーションが生ずる態様が中心的な意義をもつことになる。社会的現<sup>ソシアル・リヒト</sup>実とは何かについてのこうした見方を展開したことが、ルーマンの最大の理論的功績であった。これは、まず行為者を考えずにすむ社会觀念、全く没入間的・没主体的な特徴をもつ社会觀念である。ルーマンがこれによって斥けようとしたのは、学問的理論の害にしかならない道徳的視野狭窄であり、目的とか動機とか利害とかいった、広く見られる行為理論的な基礎概念であった。さまざまの行為とか行為者とか人格とかいったものは、コミュニケーションがそうした範疇を用いて自己観察を行うさいに出現し、それから理論に持ち込まれるものである。それらの概念は、否認したり忘れたり分析的に削り込むわけにはいかないものの、コミュニケーションの自己塑成が一定の関連で利用する——利用せざるをえない——フィクションとして理解されるべきものだ、とされる。これは、日常の常識にとつてばかりでなく、社会学の——「パーソンズ



流の「構造・機能分析的役割モデル」、「ハーバーマース流の」相互行為的役割モデルから、「ロールズ流の」合理的選択の観点に及ぶ——行為理論的主流にとつても、実にへ納得できない見方である。しかし、こうした基礎の上にはじめて、マックス・ヴェーバーがへさまざまな価値領域のへ多神教」という言い方で予告した、現代社会は差異化（デフレンツィアルクワットルム）の形式をとるといふ観念が、社会理論として完成されたのである<sup>10</sup>。

もつともシマンクは、「行為理論」の側から見れば「コミュニケーションから成り立つ社会」といふ観念こそフィクシオンだということになるかもしれない、と述べている。しかし、「行為とか行為者とか人格とか」を、（レアリテイト）実在として受けとめる立場にとつては、フィクシオンにすぎないとの宣告は致命的であろうが、実在の否定から出発するルーマンは、「社会的現実（ソシアルリヒカクト）」がフィクシオンだと言われても痛痒を感じないと思われる。

最後に、システム理論は研究プログラムとして構想されたものであり、ルーマンの著作は学者のために執筆されたものではないか、それを大学で教えることはどういう意味をもつのか、という趣旨の質問に対するルーマンの答えを紹介しておこう。

「自分の考えを学生に伝えることができれば——それが独自の見解にとどまるものではなく、公にして学界の反響を呼べるものであるかぎり——教師としてはへ以て瞑すべし」です。それに、学生は、若干の用具で概観が得られること、どこでも使える概念装置を使って概観が得られることを、望んでいます。システムという概念は、こうした概観を与えるものです。これは、へ古典的学者としては誰それがおり、かれらすべてについて知っていなければならぬ。ヴェーバー、そしてデュルケム、そして現象学、そしてシステム理論、そしてフランクフルト学派、そして何々といった羅列に尽きるような概観とは違います。後者のようにへそしてへでつないでゆくだけの概観は、学生をイライラさせるだけではないでしょうか「大学の講義には、その種のものがどんな多いことか——村上」。……システム理論は、

ほとんどすべての理論に言及し噛み砕いて解説することはできないにしても、関連を明らかにすることはできません。それに、現代社会の重要な諸問題についてコメントすること、それらの問題相互の関連を見ることが出来ます。……そのことによって、何らかの価値をめざしてそれを金科玉条とするようなアンガジュマンに見られる、ある種の一面性を防止することができます。こうして一面性に冷水を浴びせることに共感する人々がいる一方で、反感をもつ人々もいます。反感が示される場合、それは、自分の信奉する価値、自分にとってかけがえのないものが、相対化され、少なくとも距離を置いてクールに扱われるからです」。

【注】

(1) Luhmann, Die Gesellschaft der Gesellschaft, 1. Teilband, S.44 ff. この箇所だけでなく随所において、ルーマンはスペインサーブラウンを引用している。

(2) 以上の引用は、Luhmann, a.a.O., S.45 f.

(3) Luhmann, a.a.O., S.53 f.

(4) Luhmann, a.a.O., S.57 f.

(5) こうした利用の仕方は、ルーマンがスペインサーブラウンの「リ・エントリー」を用いる場合に限られない。たとえば、ルーマン、バレラ、フェルスターを講師として招いた「システム・セラピー」に関するシンポジウムの討論において、フェルスターは、「フランシスコ・バレラは、自分の自己塑成論のルーマンによる受容をどう思うかと聞かれたら、何と申すでしょうか?」という質問に——同席のバレラとルーマンの前で——答えて、こう述べている。「フランシスコ・バレラは、もちろん次のように答えるでしょう。……いや、私が見たことのあるシーンが再現されることになるでしょう。それは、「バレラと共に生物学・神経生理学の分野で自己塑成の概念を提示した」フンベルト・マトウラナがエーリヒ・ヤンチュに、社会的現象を解釈するためにへ自己塑成」という語を使わないでほしいと言ったことです。ヤンチュに対

するマトウラナの要望は、きわめてドラマティックになされました。われわれみんなが一緒に夕食をとりながら、自己塑成の観念をどこまで応用できるか話していたのです。ヤンチュは、何らかの再帰性リカージビリティの気配さえあればどこでも自己塑成の観念を適用できるという見解を強く主張しました。そこでマトウラナは、こう言ったのです。ヤンチュさん、それだけはやめてくれませんか。ヤンチュは言いました。マトウラナさん、あなたには自己塑成が判っていません。私の方がよく知っているんですよ。そうするとマトウラナは、ヤンチュの前に跪いて、へびうか私の顔を立って、この概念を使わないでください!」と言ったものです。ルーマンとバレラの相互解釈にあてはめてみましょう。バレラはルーマンに、>そんな関連で自己塑成概念を使わないでほしい、この概念は、われわれ「バレラとマトウラナ」が全然別の領域に属する概念として考え出したものなんだから」と言うのでしよう」(Fritz B. Simon (Hrsg.), *Lebende Systeme*, 1997, S. 134)。ヤンチュもルーマンも、自己塑成論を——そしてルーマンはリ・エントリーを——いわばハイパーテキストとして扱っている、とも言える。

- (6) Luhmann, a.a.O., S.59.
- (7) Luhmann, Was ist Kommunikation?, in: Simon (Hrsg.), *Lebende Systeme*, S.19 f., 20 f.
- (8) Luhmann, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, 1. Teilband, S.222.
- (9) Luhmann, a.a.O., S.223 f.
- (10) Uwe Schimank, Zum Tode von Niklas Luhmann, *Niklas Luhmann: Das Werk*, Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, Heft 1, Jg.51, 1999, S.188 f., 191.
- (11) Luhmann, *Erfahrungen mit Universitäten - Ein Interview*, in: Ders., *Universität als Milieu*, 1992, S.100 ff., 102.

(むらかみ じゅんいち・本学法学部教授)